

佳作

父の日記

愛媛県 済美高等学校一年 高橋 明依

私の父は、私が中学生のころに亡くなりました。父は私の出会った人の中で一番優しく落ち着いている人でした。母が仕事のときには、父が昼ご飯を作ってくれたり、図書館と一緒に رفتりしました。

三年程前に父のがんが発見されました。父は私にあまり辛い姿を見せませんでしたが、ご飯を食べる量が少なくなり、目に見えて元気がなくなっていました。しかし私は、父の元気がなくなっている現実に向き合えずにいました。

父の亡くなる四日前に余命宣告をされていることを知りました。父から「もう長くはないと言われてる」と知らされ、大泣きしたことを今でも忘れません。その日、父は私以外にも父の妹と弟にも余命宣告をされていることを言いました。余命宣告はずっと前からされていたそうで、やっと言えて安心したのか、次の日から容態が悪化しました。父は入院をしたくないと嫌がっていました。が、家族で話し合った末、入院することになりました。

「娘さんも幼いのに大変だろうけど。」

と言われ、正直「この医者の方に父の何が分かるのか」という苛立ちを感じました。その日は祖父母が私の家に来ていて、帰った後、私や母に寄り添ってくれました。玄関前では母と「暗い顔はあまり見せないようにしよう」と話していましたが、帰って祖父母から「今日は思っきり泣いていい」と言われ、その後は涙が枯れるまで泣きました。

父のお葬式や火葬などが終わり、ひと段落した日、父の部屋で父が毎日書き続けていた日記を見つけました。生きている間は見せてくれなかった日記を、その日初めて読みました。その日記には、全て私のことが書かれています。「明依に焼き飯を作ったら美味しいと言ってくれた」や「初めてピアノの発表会だったけれど、明依よりも緊張した」など、私でも覚えていない些細な思い出がたくさん書かれてあり、微笑ましくなりました。手帳三冊分、四年以上も書き続けられていました。読み進めると、私の中学一年生のころ書かれた誕生日の日記がありました。その内容の中で「明依には甘やかしすぎたと思うこともあるけれど、いつまでも明依の味方だからね。明依が幸せになることを、一番に願っているよ」と書かれた文がありました。多分このころから父は余命宣告を受けており、長くはないと察していたと思います。父が、がんの苦しみや葛藤の中、私の幸せを願ってくれ

入院の準備をしに病院へ行った日、父の車椅子を押しました。私や母が残したご飯を代わりに食べてくれていたとは思えない程、やせ細っていました。しかし父はいつもと変わらない笑顔を見せてくれました。

入院を始めた午前、メールの既読がつかなくなりました。母も私も父の体調の波が激しいことを知っていたため、今は体調が悪いのだなと思っていました。午後、母の携帯に病院から電話がかかってきました。母が、「容態が悪くなったって、明依も行こう。」

と言いました。入院初日の、思いも寄らない出来事で、私と母はパニックになっていました。病院へ着くと父が目を開じて寝ていました。嫌でも父の死が間近に感じられて、父を見た瞬間泣いてしまいました。看護師さんが父に、

「お二人が来られましたよ。お父様、お二人が来られるまで頑張ってくださいました。よかったですね、娘さんと奥さんが来られましたよ。」

と言いました。頭が真っ白で、何をすればいいのか、父に何と声をかければいいのか分かりませんでした。あいにく医者の方は出張で病院に帰ってくるのが遅くなっていました。父は次第に手が冷たくなり、中学生の私でも何を意味するのか察してしまいました。

医者の方が来て、父の死亡が確認されました。「想定外だった。」

たことに、涙が止まりませんでした。

入試や就職、結婚式など、これからの私の人生を父が近くで支えてくれることがないことはとても苦しく、途中で心が折れるときが来ると思います。しかし、私には心強い味方がいます。空の上から幸せを願ってくれる父に今までの恩返しも含め、これからの人生を思い切り楽しみたいと思います。